

まちはみんなのおおきな家

東京大学教授
西村幸夫

どこまでを自分の家と感じるか

ある機会にまちづくり活動の先頭に立って活躍しておられる現役のリーダーの方から、「ボランティアという言葉には違和感がある」ということを言われたことがあります。その方の言い分はこうです。

——自分の家の掃除をする時、それをボランティアとはいわないではないか、自分の庭だってそうだ、私はまちを自分の庭のように思っているから、そこをきれいにしたからといってそれはボランティアではないはずだ——

たしかに言われればそうです。自分の持ち物や家を手入れしたり、掃除したりするのはボランティアとはいいません。では、自分の家の玄関先だったらどうでしょうか。そこまで掃き清めるのは庭の続きだと考える人も多いでしょうが、公共の道路だから行政が清掃するのは当然だ、と主張する人もいます。そんな場合のために私たちは税金を払っているのだという言い分にも一理あります。

それでは、もう一歩進んで、近所の公園だったらどうでしょうか。そうした公園は自分の持ち物ではないので、わざわざ掃除することはしないのでは、とほとんどの人は感じると思います。でも、その公園で幼児を安全に遊ばせている育児中のお母さんは、少し違う感覚を持っているかもしれません。

公共の空間であつても自分との距離感で、そこを掃除することを表しています。

つまり、ここで問われているのは、「公共性」というものをどのように考えるか、ということなのです。

じつは日本には昔から、私的空間と公的空間の間をとりもつような半私的・半公的な空間が、いろいろな形で存在していました。農家の縁側や町家の土間を考えてみればわかります。こうした空間は個人が私有している空間ではありませんが、近所の人や遠慮なく立ち入れる場所でもあります。近所の人を自然に迎え入れるために工夫された建築空間だということもできます。ところが核家族が成立し、住宅も玄関の内と外とで公私が峻別されるようになってしまったからは、こうした自由で開放的な空間は存在する場を失ってしまったのです。

公共の空間の側でも、井戸端会議の「井戸端」や河原や土手のように、かつてはみんなのものと実感できる空間があつたのです。公共の空間は削り取られてしまっています。

こうした効率一辺倒、公私峻別の空間のしつらえがもたらす余裕のない息苦しさから逃れ、まちはみんなのおおきな家ととらえるような、あたたかいまちづくりが次第に求められるようになってきたとすることができそうです。おおきな家のやすらぎや大家族の安心感が求められているのです。

地域社会に必要なのは「まちの縁側」

この特集が紹介しているように、世田谷には（もちろん他のところにもありますが）、「市民緑地」や「小さな森」、「地域共生のいえ」などと呼ばれる、自分の家や庭、山林などをまちにひらいているところがあちこちに見られます。こうしたスポットはま

がボランティアと感じるのかそうでないのかという感覚が、分かれるようなのです。だから、まちづくりとは自分の家の空間を越えて、まちのどこまでを自分の家のように感じるか、その気持ちから出発するのではないのでしょうか。まちをみんなのおおきな家と感じることができたら、まちなかの活動はボランティアとは別物と感じられることでしょうか。

逆に、川掃除など、大切だとは思っていてもひとりではできないことをみんなと一緒にやる機会があると、急にその川が自分にとって、身近なものに感じられるようになるということもありま

あいまいもこととした空間の減少

一方で、自分の家も自分の城とばかり考えるのではなく、それが生み出す風景はみんなのものの一部だと考えるような心の大きさがあつたら、まちももつと魅力的になっていくのではないのでしょうか。

たとえば生け垣が良い例です。庭を囲うだけだったらブロック塀で十分なはずですが、通りからの見え方からすると生け垣にはかなわないでしょう。つまり生け垣を保つということは、自分の庭を楽しむということを超えて、生け垣はまちの風景のひとつとなり、みんなが共有している場所を生み出しているということ

さしく、まちの縁側ともいうべきみんなの空間となっています。それぞれの個人が公共にすこしずつ貢献する形で、こうした空間を生み出しているかという実験であるともいえます。核家族や一人家族といったこれからの少子化・小家族化のなかで、まちの住民の新しい形での居場所を作り出していく試みだともいえ

でしよう。

みんなの空間と感じられるようなこうした場所を、広い意味でのコモンズと呼ぶことができます。コモンズとはもともと共有地の意味ですが、その共有地が地域社会を成り立たせている重要な役割を演じていることから、共同社会の存在を枠づける共益的な空間としてのコモンズの重要性が、あらためて見直されてきています。地球がひとつの運命共同体となってきた21世紀においては、こうした発想は国を超えて全世界で共感を持って受け止められるようになってきています。

世田谷の小さな民間コモンズ(?)たちは宇宙船地球号の世界へ開かれたささやかな、しかし確かな窓だともいえるのです。



西村幸夫 ● NISHIMURA, Yukio
1952年、福岡生まれ。
東京大学都市工学科卒業、同大学院修了。
明治大学助手、東京大学助教授を経て、
1996年より東京大学教授。
専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画、
市民主体のまちづくり論など。工学博士。
主な著書に『西村幸夫 風景論ノート』（鹿島出版会）、
『都市保全計画』（東大出版会）、
『環境保全と景観創造』（鹿島出版会）などがある。

特集 地域にひらく、わが家、わが庭

